

本学 今後 10 年間の事業計画策定

学校法人中央大学は、創立 130 周年を機に、今後 10 年間の「中長期事業計画 (Chuo Vision 2025)」を策定し、2015 年 11 月 9 日付で公表しました。複数の新学部の創設、文系学部の一部 (法学部) の都心キャンパスへの移転、グローバル化の推進などを基本方針としています。

中央大学は、「**「実地應用ノ素ヲ養フ**」という建学の精神を現代に活かし、ユニバーシティメッセージ「**行動する知性。-Knowledge into Action-**」を掲げて、創立 140 周年 (2025 年) に至る今後 10 年間にこのような改革を推進し、世界に存在感のある大学を目指します。

この「中長期事業計画」の概要として、重点事業計画の 4 本柱についてご紹介します。

1. 教育組織の改編・創設 —学部増設による総合大学としての魅力向上—

現代社会が直面している課題に応えるため、教育研究体制を再編し、より充実した総合大学を目指します。

(1) ICT 系、メディア文化表現系、多言語多文化系など複数の学部の新設を目指します。これらは、比較的親和性の高い総合政策学部を発展改組し、学部単位の教員組織を学院という大きな単位に改編することによって実現するものとします。

(2) 高齢化や福祉など地域社会が抱える課題を解決するための政策形成やマネジメント、生涯スポーツを通じた健康作り、スポーツ振興等に関する教育研究を行う新学部の創設を目指します。

これらの多彩な新学部については、多摩キャンパスで 2019 年頃の創設に向けて申請の準備を進め、総合大学としてのウイングをさらに広げる方針とします。

都心キャンパス整備など4本柱



多摩キャンパス



後楽園キャンパス

2. キャンパス整備 —二大キャンパス体制の形成—

多摩キャンパスと複数の都心キャンパスを二大キャンパス体制に集約し、充実・発展を目指します。

⇒ 2面に続く

「スポーツ振興・強化推進室」(仮称) 設置へ 「法科の中央」は今も健在、印象付ける内容

⇒1面から続く

(1) 多摩キャンパスについては、施設・設備を一層充実させてグローバル・キャンパスとしての特色を強化します。国際寮を充実し、外国人留学生が食と住の不安を感じることなく留学できる環境を整備します。また、新学部の創設に伴い、必要な教育施設を2019年までに建設します。

(2) 都心キャンパスについては、最大規模の後楽園キャンパスに集約するとともに、多摩の文系学部の一部を移転して文理双方の教育研究を展開します。移転の第一候補を法学部とし、法科大学院と一体的に配置し、「Law & Law」による教育効果の最大化と効率的な運営を達成します。

これらの都心キャンパス整備は2022年の完成を目指します。

3. グローバル戦略 —グローバル化の推進—

グローバル人材であった英吉利法律学校創立者たちによる建学の精神を引き継ぎ、世界に存在感のあるChuo Universityとなるべく、種々の改革を推進します。

(1) 育成すべき人材像として「グローバル・プロフェッショナル」の概念を掲げ、すべての科目を英語等で教えるグローバルFLP(Faculty-Linkage Program)や国際共同学位、国際共同研究ネットワークの構築など、国際通用性の涵養と専門分野の学修を両立させるカリキュラムの構築を目指します。

(2) 学生の海外派遣については、学期制度の見直し、奨学金制度の充実、帰国学生のキャリア支援等を通じて、10年後までに年間2,200人へ拡大します。

(3) 留学生受け入れについては、英語で修められるコースの設置、国際寮や奨学金制度の

整備充実などにより、留学生支援を広く推進し、10年後までに年間1,000人へ拡大します。

(4) 教員構成の国際化については、10年後までに外国人教員が全専任教員の10%、外国の大学で学位を取得した日本人教員を含めて大学全体として25%となることを目指します。

4. スポーツ振興事業

学生スポーツ選手の育成強化により、実績の向上とスポーツに関する伝統の推進・発展の両面を重視し、大学としてスポーツ振興を図るための独自の施策を展開します。

(1) スポーツ振興事業の目標として、2020年東京オリンピック・パラリンピックに20人以上の本学代表選手(在学生・卒業生)を送り出します。また、箱根駅伝では、5年以内に5以内、10年以内に優勝を目指します。

(2) 推進体制として、「スポーツ振興・強化推進室」(仮称)を設置し、「オーナーズ部門」(オリンピック等の選手確保・育成・強化)と「スポーツ振興部門」を設け、中期的・長期的な強化策を一体的に推進します。

(3) スポーツ振興募金として、2020年東京オリンピック・パラリンピック強化募金制度を創設します。また、強化種目に関する恒常的募金制度を創設します。

すでにご存じかと思いますが、この中長期事業計画がプレスリリースされた直後に、重点事業計画のうち「キャンパス整備—二大キャンパス体制の形成—」について、「法学部の都心移転」が新聞各紙に大きく取り上げられました。司法試験合格者数が2015年に3年ぶりに首位奪還したこともあり、「法科の中央」は今でも顕在のイメージが強調されています。

(清野 強)

日本列島 自転車ひとり旅

その2

以前この会報に掲載させていただきました続編です。翌年の、春は北海道、秋は九州に自転車旅行をした時の旅行記です。

(渡辺 健司)



標高1018mの長者原で休憩 II 阿蘇くじゅう国立公園で

平成24年6月7日～6月23日 (北海道旅行)

今回の北海道行きも前回同様、自宅白岡から大洗まで自転車で走り、フェリーに乗って苫小牧まで行く。初日の大洗までの120km走はきついですが、フェリーに乗れば大風呂には入り放題、ビールは飲めるし、極楽。

苫小牧で下船の時、ちょうどオウム真理教のひとりが逃亡中とのことで、下船客全員が警官のチェックを受ける。こんなこともあるんだなあと思う。身支度を整え走り始める。支笏湖畔で1泊し、ニセコを経て、余市、小樽と走った。

1泊したニセコキャンプ場は相当高いところにあり、かなりの距離を押して登る。ちょうどこの時期は曲がり竹の筍採集の季節で、山道わきに車が何台も止まっている。とてもおいしい筍とのこと。曇りがちの天気、羊蹄山の雄姿が眺められなかったのが心残り。余市で民宿に泊まる。小樽をすぎて海岸沿いの国道5号線を

いきなりオウム事件のとぼっちり

走っていると、カタカナとロシア文字の看板が何件か目につく。よく見ると日本の中古自動車を輸出しているロシアの業者の様子。この地はロシアがすぐそこにある事を実感。興味深い。

留萌までは海岸沿いを走り、そこから内陸に入り、旭川に抜ける。留萌の黄金岬キャンプ場でテント泊。このキャンプ場は道路をはさんで岩場のある海岸の手前にあり、海に沈む夕日を見ながらの夕食は格別。軽四キャンピングカーのおじさんと一緒に食事。

旭川への途中のキャンプ場、秩父別(ちっつぶつ)では役場の職員が見廻りに来て、少し話をする。彼は50歳ぐらいで、東京の大学を出て、故郷のここに帰ってきたが実は東京の生活が大好きで、帰って来たくなかったとのこと。田舎の暮らしにくさと、東京の下町の都会人の中の居心地の良さを、滔々と話す。私はうなずきながら話を聞いた。彼は何枚かテントと私の写真を取り、役場のホームページに載せたいが良いかと聞く。私はうなずく。 ⇒4面に続く

⇒3面から続く

旭川を過ぎ、美瑛の美しい景色を眺める。美瑛では自転車で良い景色の中を走っている人が結構いる。私のような重装備サイクリストはほとんどいないが。美瑛の道の駅では、昨年到现在に思いがけないことがあった。若いきれいなお嬢さんが私と私の自転車の写真を撮らせてほしいとのこと。彼女はサイクリング好きの自転車マニアの様子。何枚か写真をとって、お礼にと言ってビール券をくれた。昨年はここで台湾人の自転車旅行中カップルに出会う。その女性に、「あなたの自転車のサドルは私の彼の物と同じメーカーだね。」と英語で言われた。その時も驚いた。ちなみに、私の自転車のサドルは英国のブルックス社製。革製で、長く使っていると乗る人の尻の形に変形してしまうので、長時間走行でも尻が痛くならないというもの。とても良い。

その美瑛を過ぎ、私が退社した会社の同僚が育ったという赤平を通過する。この町は、石炭廃坑後はさびれて、今は静かな町。一路、南下して今回出発地点の苫小牧に向かうが距離はま

中高年から娘さんまで、会話は尽きず

だかなりある。途中、雨に降られて公園の東屋にテントを張ってじっとしていると、犬を連れて老人が話しかけてくる。お互いに時間をもてあましてるので話が弾む。老人は自分の生い立ちから、北海道内を転々と職を変え暮してきたことを延々と話す。

翌日も雨交じりの曇り空で、三笠市にあるライダーハウスに泊まる。ライダーハウスとはオートバイ乗り、自転車乗りのための簡易宿泊施設で、北海道には何件もある。素泊まりで、だいたい千円くらいで泊まれる。この三笠のライダーハウスはちょうど泊まり客が3人。オーナーがやってきて今日はバーベキューをしますと言う。外は雨だったが、旧駅舎の屋根の下で、その家族と私たち3人とでパーティーが始まる。材料は全部オーナー持ち。とても賑やかで、とても愉快で、とてもありがたいと思う。

翌日は北海道最後の日、苫小牧まで走り、フェリーに乗る。

北海道は自然が美しく、人との出会いも興味深いものがあります。そして、来年もこの時期に来ようと思うのでした。

平成24年9月20日～10月4日（九州旅行）

自宅白岡を出て、国道4号をひた走り銀座を抜けて東京湾有明埠頭まで走る。そこからフェリーで福岡県新門司港まで34時間。船内で中年の男性客が九州のことをいろいろ話してくれる。彼は久留米の人で52歳、関東での仕事を終えて九州に帰るところ。感じのよい人で、お互いに時間はたっぷりあるので詳しく教えてくれる。

下船後、博多を目指す。当地の親戚に1泊し、フェリーで話を聞いた九重高原に向かう。その「やまなみハイウエー」はとても景色のよい道路。登りはつらいが、登ってしまえば広い高原の中をおいしい空気を吸って浮き浮きと走る。杉の戸峠の庭園にある小高い東屋下でテン

九重高原へ阿蘇、ユース泊

ト泊。朝の気持ちのよいこと、このうえなしと思う。

九重高原を下り、阿蘇山を目指す。阿蘇に登る手前でかなりの疲労を感じ、その日はユースホテルに泊まる事にする。ユースホテルに泊まるのは40年ぶりのことなので懐かしさでいっぱい。昔とほぼ同じ雰囲気がある。大きく違うのは自分の年齢ぐらいか。こうやって旅行をしていると歳のことは考えないし、自分は若いつもりでいるから不思議だ。このユースホテルは昭和48年からやっているという。広い食堂兼居間にはピアノとギターがある。泊まり客は3人。私がギターを弾いていると大阪から来たという若者が、教えてくれという。2台あったので一緒にやっているとな夜が更けてしまった。

⇒5面に続く

日本1周の若者と 出会い元気が出る

⇒4面から続く

翌日は阿蘇の登り、ほぼ全行程で自転車を押し登る。天気はよく雄大な景色が私を圧倒する。進むのが遅いので、ゆっくり景色を楽しむことができるのは、自転車の特権か。お釜直下のロープウェイ乗り場に行くと、風向きが悪いとのことで運転を中止している。噴煙が有毒とのこと、がっかり。

晴天の阿蘇を下り、民宿で一泊。熊本市郊外を抜け、八代市の河原の芝地でテント泊。雨に降られる。台風17号の影響で翌日も雨。1日中雨との予報なのでテントをたたんで図書館に行く。そこで1日過ごす。立派な図書館で、係員の女性もとても親切でうれしい。その日は市内のビジネスホテルに泊まる。

翌日は水俣の広い公園でテント泊、日本1周中の若者に会う。仙台の志田君。仙台から左回りで6月に出発、あと2カ月はかかりそうとのこと。こういう若者と出会うと私も元気が出るし、日本の将来も明るいと思う。



阿蘇山で

日本の原風景と文化凝縮

彼と別れて、さらに薩摩川内を通過して串木野で民宿に泊まる。枕崎を経て、最終目的地、坊の津の親戚の家に着く。ここは次男の嫁さんの父君の家。夜はビールを飲みながら話し込む。

翌日、新鹿児島駅を目指しひた走る。途中、保温ボトルを落とす。段差の乗り越え時で気がつかなかった。無念。駅前のホテルに泊まり、翌日の新幹線で帰る。

以上、今回の九州旅行は、九州を北から南北に縦断したわけだが、九州は意外とコンパクトだな、という感じ。北海道などと比較すると日本の原風景、文化が凝縮されているように思う。今回も思う、自転車旅行をすると日本はやはり広いということと、それぞれ各地の趣の違いが分かりとても興味深い。

豊かな気持ちで

白門50会の事始めは、いつも通り箱根駅伝の山の上り下りからの応援であった。暖冬の正月、声を大きく張り上げて各大学の選手の背中を押した。母校の総合成績は走者の力及ばずの結果になりやや肩を落としたが入試シーズン到来を告げるセンター試験の初日、朝刊紙に中央大学の全面広告を目にして心躍る感じを覚えた。ご覧になった方も多いと思うが、バレーボール部の石川裕希君を登場させていた。PDCA サイクルをしっかりと回せる理想的な人物像として描き出され「世界で戦うために、中央大学を選んだ」事情が記されていたように思う▼今年の桜はいつ頃になるだろうか。見事に咲きそろった花々をまだどこかで見たいものである。見頃の時に桜に会いに行くのは難しい。時間に制約があればなおさら大変だ。白門50会は今年も花見を予定している。マッチングを強く念じ多くの方のお越しを望んでいる▼今年も豊かな気持ちで過ごしたい。エクササイズ、読書、趣味などを自分の目線で進め、仲間たちの刺激を受け退職後のとかく緩みがちな気持ちに張りを持たせたい。白門50会平成28年度もどうぞよろしくお願ひします。

(塩谷 治史)

駿河台 青春の日々

大学で最初に入ったサークルが新聞部だった。新聞部とは名ばかりで実態は新左翼系のセクトの溜まり場。まだ、学生運動の名残が影を落としていた時代で文科系のサークルで影響を受けてなかったところは少なかったように思う。新入部員はたった一人で、いきなり成田の三里塚に連れていかれた。高橋和巳という作家が死んだ頃で、新聞の1面のタイトルは「高橋和巳への挽歌」。学生運動とは一線を画していた1年上の先輩がほぼひとりできつくりあげたのに「お前は文学新聞にするのか」という上級生からの怒鳴り声。こんな所はたまらんと3か月で飛び出した。

2年生になると、ユースホステル研究会というサークルに誘われて入った。ユース

ホステルには泊まったこともなく、興味もなかったが、新聞部で懲りていたので、軟派系になびいたのかもしれない。入ってみると、新聞部とは対照的に明るいキャンパスライフが待っていた。中大にもこんなにかと思えるほど、女子学生が多く華やかだった。50 会の人の中には中大で女性を見たことがないという不幸な青春を過ごした人もいるようだが、いる所にはいたのである。四国の鳴門で半月ほどユースのヘルパーをしたり、日本全国を旅したり、青春を謳歌させてもらった。50 会の入会も、ユースの1年後輩の女性が51 会の執行部にいたことがきっかけになっている。

(本多 俊彦)

ルーチン

ラグビー日本体表がワールドカップで三勝をするという快挙が報じられた。もちろん史上初であり、強豪南アフリカに勝利したことも大きく報じられた。過去8回出場したWカップでわずか1勝しかしていないチームが2015年イングランド大会で3勝も挙げてしまった。この快挙は日本中が明るい話題と歓喜した。残念ながら決勝トーナメントには強豪の壁に阻まれ、進出できなかったが快挙には違いない。

中でも一躍有名になったのは正確なゴールキックが持ち味の五郎丸歩選手だ。はっきり言って全く知らなかった。今回のワールドカップの結果報道で初めて知った。ゴールキックを難しい位置と距離から見事に決めるシーンが何度も報じられた。一躍時の人となった。

その五郎丸歩選手は、キックする時に、必ず行う動作がある。先ずゴールに向かって慎重にボールをセットし、ボールの後方に下がり、ボール越しにゴールを見通し、両手を胸の前で合掌のポーズで静止し、まるで「どうかゴール内に飛んでくれ」と祈るかのようキックするのである。いわゆるゴールキックへのルーチンである。

ルーチン、routine 決まりきった仕事、であるが、スポーツ選手に多く見られる。大相撲初場所10年ぶりに日本出身力士として優勝を飾った琴奨菊の制限時間いっぱい仕切りでの海老反りも気合が入るといふルーチンであろう。プロ野球界では広島の前田健太、登板前に行うマエケン体操は有名だ。ゴルフでもパット前には多くの選手が一定の作業を几帳面に決めて構えるようだ。

自分も毎朝事務所で、先ずは掃除機、モップをかけ掃除する。次にトイレをきれいにし、最後に幸せを持ってきてくれるお客様がお越しただけですようと玄関を念入りに掃除する。当社の始業ルーチンだ。決まったことをきちんとやるというのは習慣になってしまえば楽である。面倒だとか、嫌だとかいう気が起きなくなる。スポーツなどにしても余計なことは考えずに取り掛かれるから良いのだろう。箱根駅伝、予選会に3度も出るとなると、駄目なルーチンとなってしまう。来年こそ断ち切り、シード権を奪還し、従来のルーチンを始めてもらいたいものだ。

白門50会も、毎年ルーチンで事業を消化している。たまにゴールを外すことがあるかもしれないが、駄目がはつきりするまでは続けていきたい。

次は総会だ。

(山井 俊昭)